

国立大学

国大協広報誌

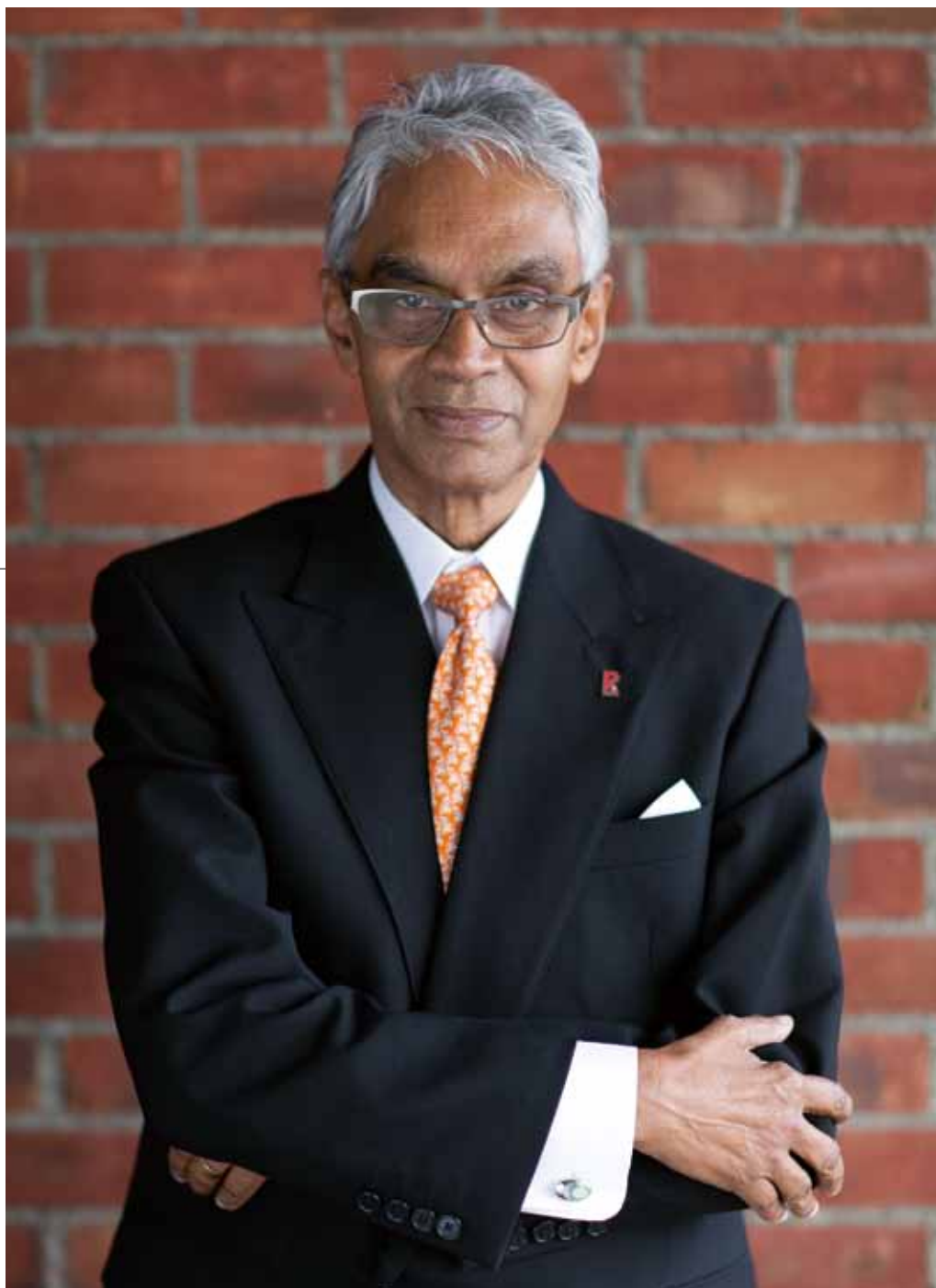
Quarterly Report

vol. **36**

March 2015

【特集】国立大学改革の新局面——ガバナンス改革

ガバナンス改革で進化する大学



Opinion

モンテ・カセム

前立命館アジア太平洋大学長
学校法人立命館評議員・理事補佐
立命館大学国際平和ミュージアム館長

人材育成を使命とする日本の大学は、
グローバル社会へ貢献する強い志を
もつと世界に訴えるべきです。

国立大学協会

The Japan Association of National Universities

声明「地域と国の発展を支え、世界をリードする国立大学!!」を公表

平成16年度の国立大学法人化以来10年が経過しました。国立大学協会では、これからの我が国の社会・経済の長期的な動向を見据え、国立大学の将来ビジョンと主体的な改革の方向性を自ら明らかにするため、基本的な考え方を会長声明としてまとめました。

今後さらに検討を進め、具体的なアクション・プランを策定する予定です。

【声明の概要】

すべての国立大学は

地域の「文化・社会・経済」を支える拠点

- ・地域の文化、社会、経済の発展に貢献します。
- ・地域創生に貢献します。
- ・地域の拠点機能を充実します。

すべての国立大学は

社会・世界に開かれた「学生の学び場」

- ・高度な学びの場を提供します。
- ・世界に挑戦するたくましい学生を育成します。
- ・安定的に優れたサービスを提供します。
- ・社会とともに学生を育成します。

すべての国立大学は

多様な価値を創造する「研究の源泉」

- ・多様な知を創造します。
- ・イノベーションを創出します。
- ・我が国の研究水準を高め世界をリードします。

(詳細は、
<http://www.janu.jp/news/teigen/20141219-y-018.html>)

国大協の動き(平成26年12月～27年3月)

平成26年 12月11日	「科学研究の健全性向上のための共同声明」を発出
12月16日	声明「地域と国の発展を支え、世界をリードする国立大学!!」を発出
12月18日 ～19日	国立大学法人等若手職員勉強会
平成27年 1月23日	臨時学長等懇談会
2月13日	第5回理事会
2月26日 ～27日	新規理事・事務局長就任予定者研修会
3月5日	第3回通常総会



上記の内容については国大協ホームページ
(<http://www.janu.jp/>)からご覧いただけます。

【特集】国立大学改革の新局面

ガバナンス改革

EPISODE 1

3

次世代型運営改革

秋田大学

EPISODE 2

5

学長主導の改革推進

長崎大学

Opinion

8

前立命館アジア太平洋大学長

学校法人立命館評議員・理事補佐

立命館大学国際平和ミュージアム館長

モンテ・カセム

発見！国立大学

11

Study & Products

帯広畜産大学

福島大学

東京学芸大学

横浜国立大学

三重大学

神戸大学

広島大学

熊本大学

今、学生は！

13

弘前大学／弘大離子組

東京医科歯科大学／田代 燦さん

名古屋工業大学／ロボコン工房

徳島大学／武知実波さん

ガバナンス改革で進化する大学

イノベーションの創出Ⅰ vol.33

イノベーションの創出Ⅱ vol.34

グローバル化 vol.35

ガバナンス改革 vol.36

健全な大学経営のためのガバナンス改革が求められておりますが、大学が自由な発想で自律的かつ自己責任の下に、学生ひいては社会に対して責任を取りうる高質な教育・研究を推進するためのガバナンスとは如何なるもののでしょうか。少なくとも、学長の鶴の一声で物事が決定されるようなものではないはずです。

大学のステークホルダーは学生と社会であり、将来、社会で活躍し、社会と自分を幸せにする能力を修得させる行為が教育でありましょう。大学には社会のリーダー的人材の育成が期待されており、大学教員には、良識と指導力、経営感覚そして学生と大学に対する責任感が求められます。学校教育法と国立大学法人法が改正されるに至った理由は、教育を司る教授会が社会に見える形でステークホルダーのニーズを汲み取るなどの機能を十分に果たしてきたとは言い難いこと、言い換えれば、教授会と学長・役員会の意識の共有が不十分であったことによると考えます。

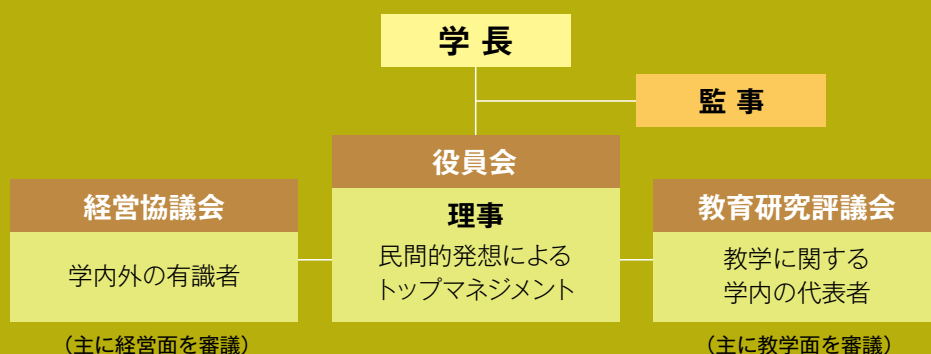
改革を速やかに進めるために、学長の権限強化、ガバナンス強化は必要ですが、学長が予算や人事権を掌握しても、教授会の意識が学長と同じベクトルになれば、改革をしても形だけのものとなり、学生・社会に責任を取りうる教育には至りません。ガバナンス強化は、学長の押しつけではなく、学長が教職員との意識共有を図ること、そして結論が出ない際の学長の決断を支えるものにするべきでありましょう。その意味で、改正学校教育法は、まさに学長の力量を厳しく問うものであります。

今号では、学長のリーダーシップによる大学改革の取り組み例をご紹介します。



脇口 宏(高知大学長)

国立大学法人のガバナンス体制





理想の大学経営はお金を稼ぐ事ではなく、良い教員を揃え、良い学生を育てて社会に貢献することだと語る澤田学長。

EPISODE 1

次世代型学部運営「連携運営パネル」で 大学改革を推進する。

「コミュニケーション」と「信頼」こそが
ガバナンス改革の要となる。

秋田大学

国際資源学部新たなガバナンス 「連携運営パネル」を導入

2014年6月、学長がリーダーシップを発揮しやすい環境を整えるため学校教育法と国立大学法人法が改正された。法人化から10年、教育、研究そして社会貢献において、確実に成果を上げてきた国立大学に、なぜ今、ガバナンス改革なのか。長引く不況から日本が再興するための第一歩を踏み出し、力強く進めようとしている中で、さらに大学を改革し、国際的に通用する人材育成、イノベーション創出、地域活性化などを目に見える成果として出すことが強く望まれているためだろう。今回は、社会のニーズを汲み取るガバナンスを大胆に取り入れた秋田大学を紹介する。

2014年4月、秋田大学に新設された「国際資源学部」。ここに新たなガバナンスが導入された。これまで学内者中心の学部運営を、ステークホル

ダーの1つである実業家や学外研究者が約半数を占める「連携運営パネル」で行うというものだ。この「連携運営パネル」は2つの「カウンシル」から構成される。「教育研究カウンシル」は教育課程の編成など教育研究に関する重要な事項を、「学部運営カウンシル」は組織の設置・廃止や予算など運営に関する重要な事項を審議する。さらに、教授会は学位授与や試験など学生個人に関する教学面と「連携運営パネル」から付託された専門的事項を審議する。

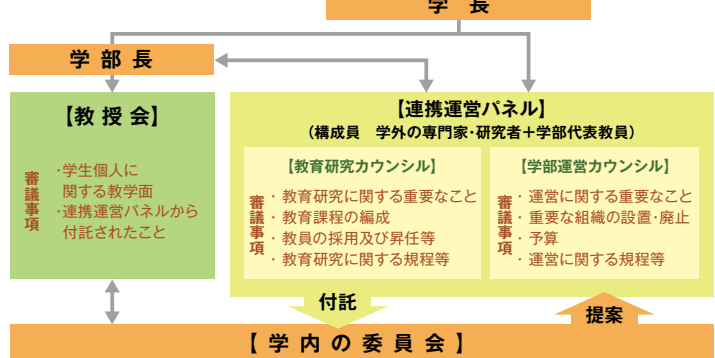
澤田賢一学長は「連携運営パネル」の効果をこう話す。



澤田賢一 学長

北海道大学医学部卒業。専門は血液内科学。北海道大学医学部附属病院講師・同医学部教授、秋田大学医学部教授、同大学院医学系研究科長を経て、2014年学長に就任。「澤田ビジョン」を掲げて独創的な大学改革に挑戦する。

秋田大学のガバナンス体制



「大学運営の意思決定にステークホルダーである学外の方々を入れることはとても重要です。社会の声を学部運営に反映できるとともに、意思決定の迅速化、透明化が図れます。また、社会への説明責任や、学長の暴走を止めるのにも役立ちます」

また、「連携運

営パネル」と「教授会」が役割を分担しプロフェッショナルな運営に徹することで、これまで学部運営に時間を割かれていた多くの教員が教育研究に専念できるようになると言う。

秋田大学の新たな取組は、これまで国立大学のガバナンスの課題と言われてきた社会のニーズの汲み取りや速やかな意思決定などを一気に解消しうる、画期的なものに映った。

「コミュニケーション」と「信頼」で大学を挙げて改革を推進

しかし、学長がリーダーシップを発揮できる環境を整えたとしても、教職員がそれに共感し動かなけ

れば何も始まらない。澤田学長はガバナンスがうまく機能する秘訣をこう話す。

『「コミュニケーション」と「信頼」。これなくして改革はあり得ません。秋田大学は、国際資源学部だけでなく、どの学部も改革に協力的です」。学部を越えたコミュニケーションの場を設け、連携を強化する試みは、すでに医学部と理工学部が始まっている。「私が学長になってから医学部、理工学部の教員と一緒に議論する医理工連携「夢を語る会」を作りま

した。医学部の教員は医療現場のニーズをよく知っている。理工学部の教員と協力すれば、新たなものを生み出すことができます」

一方、澤田学長は、学生とのコミュニケーションにも熱心だ。定期的に学生を学長室に招き、懇談会を開催し、学生の似顔絵を描きながら話を聞く。

「大学運営にとって、学生の考えを知ることとはとても重要です。学生は皆、物事を真摯に考えているのです。だから大学は学生がいるから存在します」大学院医学系研究科長の時代から描き続けた学生の似顔絵は、今でも澤田学長の宝物だと言う。

最も大切なことは教育と研究による社会貢献、そして多様性

ガバナンスは大学を運営するための手段にすぎない。それを活かして大学は何を成すのか。澤田学長は、理想の大学経営をこう語る。

「大学における良い経営は、どれだけお金を稼いだかということではありません。どれだけ良い教員を揃え、どれだけ良い学生を受け入れ育てられるか。その結果、社会に認められる貢献がどれくらいでき

たかということ。また、大学の持つ多様性は重要です。世の中は絶えず動き、いつ違う風が吹くかわかりません。吹いている風にいつでも対応できるように、各々が自らを磨いていくことが大切です。一方、大学は、すぐに成果が出ないことでも、教員が腰を据えて取り組めるようにしなければなりません」

「澤田ビジョン2014」。 したたかさと柔軟さで未来を創る

2014年11月、「澤田ビジョン2014」が公表された。「教育」「研究」「社会連携」「国際化」を4本柱に、激動する明日に向け、社会を支えるしたたかさと柔軟さを持った個性的な人材を輩出し、秋田と日本の明るい未来を創出するというもの。澤田学長率いる秋田大学の挑戦の始まりである。

「まずは、教職員が前を向いて、それぞれの職に専念できる環境を整えたい。そして、一人ひとりの大学人が自分の専門分野でトップを目指し努力し続ける。その結果として「いぶし銀」のような存在感がある地方の名門大学を目指します」

コミュニケーションと信頼を持って突き進む澤田学長に、学内外から熱い期待が寄せられている。



上:学長室で学生と歓談する澤田学長。
下:澤田学長が描いた学生の似顔絵。

学長主導の
改革推進

大胆な学士教育改革で長崎から国際社会のリーダーとなる人材を輩出する、と意欲を燃やす片峰学長。

EPISODE 2

学長主導のガバナンス体制で推進する 長崎大学モデルの「学士教育改革」

学生の主体的な学びを実現する教養教育で
地域から世界に「個性」の光を放つ。

長崎大学

大学病院改革で見せた手腕が 「学士教育改革」を導く

法人化から10年、国立大学は大きく変わりつつある。どの大学も競争社会を生き抜くための改革が要求され、自主的・自律的な機能強化を目指してきた。経済産業省が打ち出した「社会人基礎力」、文部科学省が定義した「学士力」など、大学教育に求められる期待はますます高くなっている。国立大学の学長が、いかにして学長主導のガバナンス体制を確立し、迅速な改革を推進できるかが最大の課題となっている。

そうした状況の中で今、長崎大学の「学士教育改革」が注目を集めている。

「国立大学の法人化は大変ではあるけれど、地方の大学にとって1つのチャンスではないかと考えたのです」

そう語るのは、長崎大学改革の舵取りを任された片峰茂学長。



片峰 茂 学長

長崎大学医学部卒業、東北大学大学院医学研究科修了。専門はウイルス学。米国国立癌研究所国際研究員、長崎大学医歯薬学総合研究科教授、副学長、理事を経て、2008年学長に就任。2014年、国立大学協会副会長に就任。

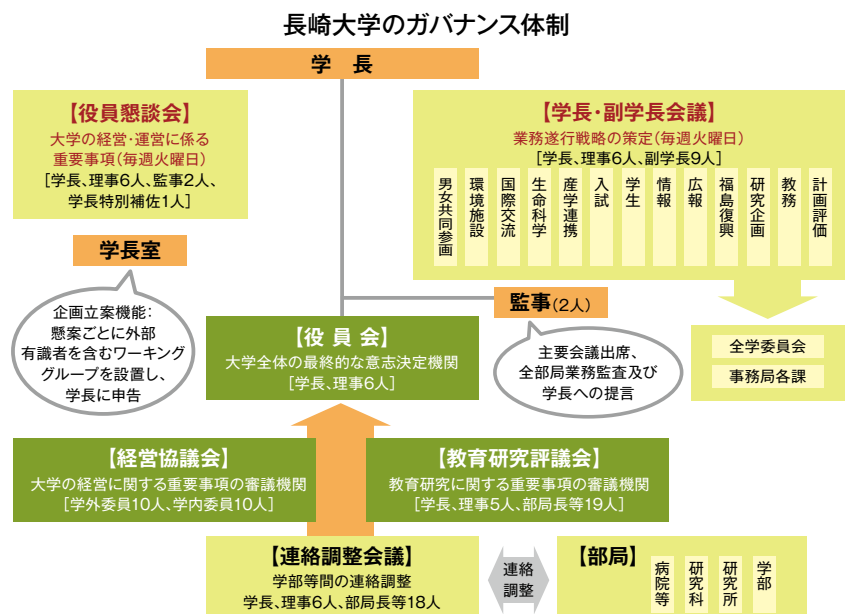
片峰学長が就任して最初に行ったこと。それは、山積みの難題に対し、ワーキンググループ（以下WG）を設置して、大学としての意思決定を素早く出せるシステムを作ったことだ。

「本学には、附属病院があったのですが、どうしても大学本体と切り離す必要があったのです。このライン作りが意外にうまくいきました」

これが、学長主導のガバナンス改革の引き金になった。2008年に「大学病院改革検討WG」を立ち上げ、翌年には医学部附属病院から大学病院への改組にこぎつけた。予算及び人事を大学本体か

ら独立させたことで、病院経営指標が劇的な改善を見せた。

長崎大学のガバナンス体制におけるWGは、学内外から人選された有識者6～8人で構成されている。それらのWGを①大学の経営・運営に関する事項、②業務遂行戦略の策定、③教育研究に関する事項などのおよそ3つのラインに分け、取りまとめられた意見を大学運営に迅速に反映する。このプロセスは常にオープンで、1つのテーマに対し1つのWGが立ち上がると約3ヵ月で、具体的な形になっていくという。さらに、広報やシンクタンク機能な



どは民間の専門家に委託する。学外の人材を入れることはこれまでの国立大学にはあまりなかった。また部局との意思の疎通を図り、部局長の所信表明を皆で共有するようにした。

業務をライン化し、学長に責任と権限を集中させるこのシステムが、「学士教育改革」を進める原動力となった。

逆転の発想から生まれた 長崎大学モデルの教養教育

2008年に中央教育審議会から「学士課程教育の構築に向けて(答申)」が出され、コミュニケーション力、問題解決力などジェネリックスキルを含む「学士力」の質保証が強調された。

しかし、長崎大学は総合大学ではあるが理学部、文学部、法学部などの学部がない。「学士力」を高めようにも、多様な学部のある総合大学と同じようにはいかなかった。そこで学内で3年に及ぶ議論が行われた。そうして出た結論が、長崎大学モデルの教養教育を作ろうというものだった。

「全学教育検討WG」、「新しい教養教育の具体像作成WG」が次々立ち上げられ、「全学共通学士像」及び「長崎大学教養教育理念」を策定し、独自の教養教育カリキュラムが完成。2012年、「モジュール方式」による、まったく新しい教養教育がスタートした。

モジュールとはあるテーマで独自にパッケージ化された科目群のこと。学生は興味のあるモジュールの1つを選択する。アクティブ・ラーニングを主体とした「学生参加型の授業」で、1年半にわたって

て学部の垣根を越えた学生と教員の「学びの共同体」が形成される。

グローバルな人材育成のために英語力強化にも力を入れ、各学部で卒業時のTOEICの目標値を設定した。さらに、2014年には「多文化社会学部」を新設。専門科目を英語で学ぶ授業、海外への短期留学必修化、教員の多国籍化など、学士教育改革のドライビング・フォースとして、大きな期待が寄せられている。

長崎大学の個性や強みを活かし、 世界でも輝く人材を育成する

長崎大学の掲げる「全学共通学士像」は、「研究者や専門職業人としての基盤的素養を持ち、自ら学び、考え、行動し、地球や地域社会に貢献できる人」。



多文化社会学部の研究棟に設置された「多文化ラウンジ」。ここではディスカッションや映画鑑賞などを行う英語カフェが毎日開かれるほか、コーピングフェローが常駐して学習相談にもつてくれる。



松坂誠應 理事(教学担当)・副学長
長崎大学医学部卒業。専門はリハビリテーション科学・福祉工学、整形外科科学。英国サウサンプトン大学医学部留学、長崎大学医学部教授、同学部保健学科長を経て、2014年理事・副学長に就任。片峰学長とともに大学改革を推進する。

地球上のどこへ行っても輝く人材を育成することだ。「学士教育改革」の原点はすべてそこにある。

片峰学長はこう話す。

「人材育成に求められるのは多様性です。これからの地方大学はそれぞれ個性化しなければならぬ。日本の最西端にあって大陸を見据え、西洋文化や西洋医学伝来の窓口であった出島を有し、原爆被爆地である長崎は、歴史・文化・地理に特徴があります。また本学は、実学が多く、現場に強く、行動力があります。そのため危機に強く、東日本大震災とその後、福島原発事故にも、どの大学よりも早く現場にかけつけ、支援活動しました。この地域性と特性を大学の『個性』として活かし、社会に貢献する。我々が目指すのは世界に個性の光を放つ地方総合大学です」

片峰学長を側で支える松坂誠應理事・副学長は、「学ぶ力、考える力、関わる力、表現する力」を育成することこそが教養教育の基本だと言う。こうした力を養うモジュール方式に関し、松坂理事・副学長は「長くりハビリの研究に関わってきた私は、モ

ジュールとは、例えば、標準型車イスを利用者に合わせて、部品交換可能な車イスにカスタマイズする、というようなものだと思っています。多様な現場で実践的に使える能力が必要なのです」と話す。片峰学長と「学士教育改革」を推し進めてきた理解者の言葉だ。

ガバナンス体制が生む学士教育改革で 地方から世界に貢献する

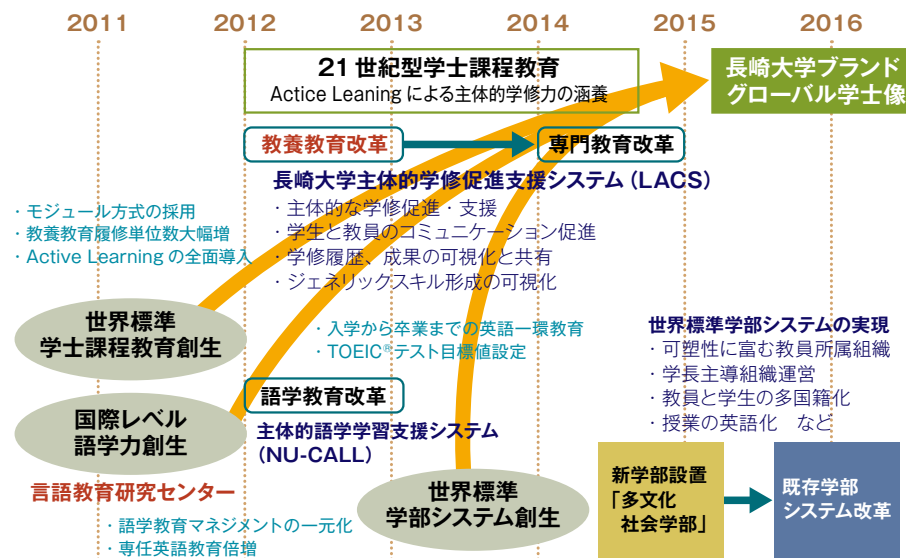
長崎大学の教養教育改革や「多文化社会学部」の設置など、改革が成功したのは、学長の決断力とそれを実現する組織体制を構築したことにあつた。今後、国立大学では、各大学の強みや特色を最大限に活かし、世界に開かれた教育・研究を行うことが求められてくる。長崎大学は、歴史的に熱帯医学・感染症、放射線健康リスク、海洋資源・環境に関する学術分野を長年にわたりリードしてきた。

片峰学長は「エネルギー問題、食料問題、環境破壊、感染症など、今や世の中は地球規模で解決しなければならぬ問題に溢れている。地域に根ざした研究でも、世界に貢献するものであってほしいんです」と語る。

グローバルヘルスへの取組の重要性が高まる中、2015年度には、別々の研究科にある、熱帯医学専攻と国際健康開発専攻を統合し、「熱帯医学・グローバルヘルス研究科」を新設する。さらに、2016年度は本学、千葉大学及び金沢大学による共同大学院

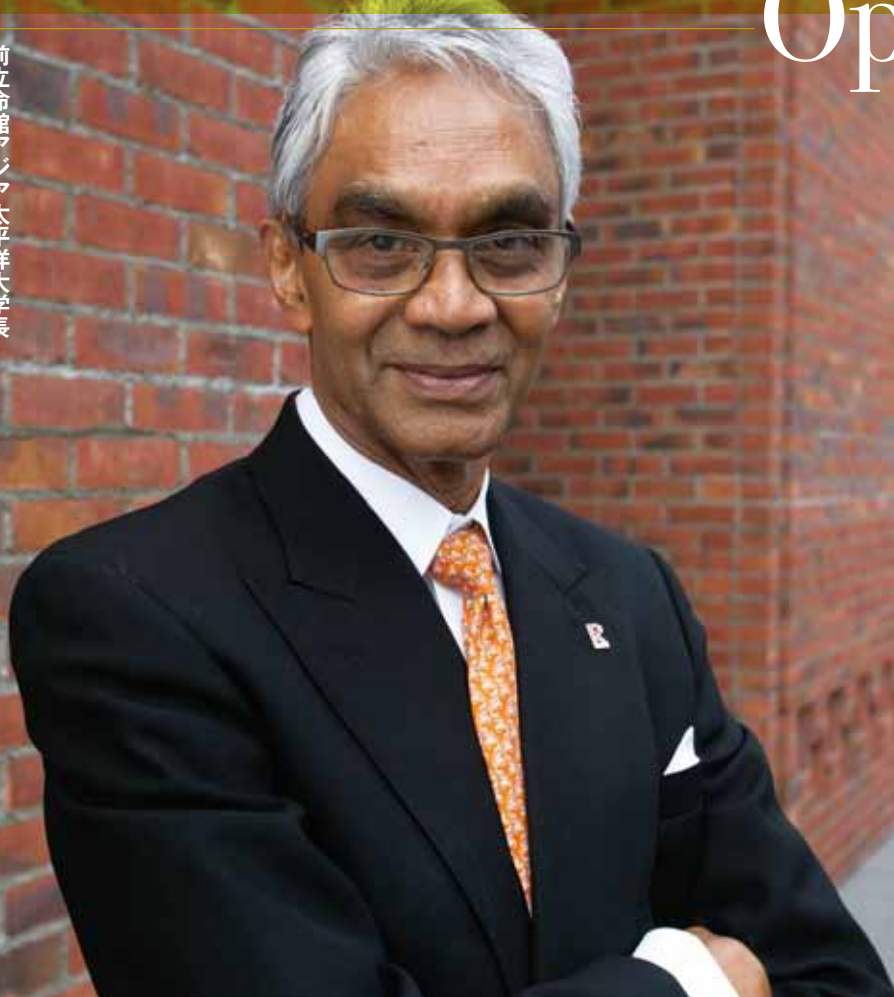
「先進予防医学共同専攻」を設置する予定だ。自らの「個性」を活かし、長崎ならではの研究成果と人材を育成し、それを世界に向けて発信する長崎大学。学長の強いリーダーシップにより、大学改革はさらに続くことだろう。地域から世界へ。長崎大学の今後の動向に注目したい。

長崎大学の学士教育改革



モンテ・カセム

前立命館アジア太平洋大学長
学校法人立命館評議員・理事補佐
立命館大学国際平和ミュージアム館長



撮影／鈴木理策

国土計画、都市工学、環境科学などの専門分野を活かし、日本で幅広く活躍するスリランカ生まれのモンテ・カセムさん。立命館アジア太平洋大学の学長に抜擢され、真の国際人を育成するため積極的に大学改革を行ったカセムさんに、ガバナンス改革の経験、日本の大学の未来像などをお聞きした。

人材育成を使命とする日本の大学は、グローバル社会へ貢献する強い志をもっと世界に訴えるべきです。

使命は大学の理念を達成すること。まずは、組織改革に取り組んだ

日本初の本格的な国際大学として大分県別府市に設立された「立命館アジア太平洋大学」(Ritsumeikan Asia Pacific University 以下APU)。世界50か国から未来を担う若者たちを集め、ともに学び相互の文化や習慣を理解し合い、人類共通の目標を目指す知的創造の場として2000年4月に誕生した。この大学で、約6年間、学長として手腕を振るってきたモンテ・カセムさんに、その時の経験を語ってもらった。「APUは設立時、基本理念を実現するため、留学生を50カ国から受け入れ学生の半数とすること、教員の半数を外国人とすることを目標にしていました。私が学長に就任した時、50カ国から学生を受け入れていましたが、その他は未達成でした。私は坂本前学長の意思を継ぎ、まずその目標を実現することにしました」

目標を達成するため、カセムさんが最初に行ったのが組織の強化だった。

「設立当初、立命館大学の運営管理システムをAPUに植え付けたのですが、これまで日本になかった新しい大学では適応しない部分もあり、改革を必要としていました。ほぼ半数の



教員と学生が外国人という国際的な組織のために出てきた矛盾です。最初、学生たちから不安

の声があがりました。私が就任する少し前からウェブサイトに、新しい学長はヘリコプターから落下傘のように大学に降りてきて、我々の悩みや不満を解決できると思っているのか、みたいなことがたくさん書かれました」

そこで、カセムさんはとことん学生たちと直接話し合い、ついに彼らを味方につけた。ここからカセムさんの大学改革が始まった。

教員に対しては、幹部職員が戦略的課題を話し合う年2回のレビューミーティングに、オブザーバーとして全員参加できるようにし、また、外国人数員が自由に意見を言い情報を共有できるように、定例運営会議に同時通訳を入れた。

「まず、皆が頑張ろうという気持ちになる環境作りが必要と考えたのです」

入学、教学、就職を改善することで、留学生の好循環を実現する

学内の体制を整えたカセムさんは、次に、留学生の改革に独自の発想で取り組み始めた。

「企業の資金援助による奨学金を利用し、海外からトップ学生を入れました。すると、APUの評判が広がって各国の優秀な学生が自然と集まりました。次に学生たちの教学の期待に応えるため、規模を拡大して専門教育を充実しました。さらに就職です。当初、留学生には母国のリーダーとして親日関係が拡大することを期待していましたが、日本の企業からグローバルに活躍できる人材を採用したいとの強い要望があり、日本での就職にも力を入れるようになりました。2004年当初の40社がどんどん増え、今では400社以上が採用のためAPUを訪れ、国際学生の6割が日本で就職しています」

カセムさんは、留学生の入学、教学、就職を改善することで、それぞれに良い影響を与え、留学生の好循環を生み出すことに成功した。

人口減少の歯止めなどで地域に貢献。APUは愛される大学へと成長した

大分県と別府市から多額の補助を受けて設立されたAPUにとって、地域貢献は必須の課題であった。2010年に公表された大分県実施の「大学誘致に伴う波及効果の検証」によると、APU誘致により人口減少への歯止め効果、地域の課題解決や教育面での貢献、大分県下で

年間220億円の経済波及効果があったという。

「この結果を見た時はホッとしました。どうか責任を果たせたと。また、地域との関係では、設立前、多くの住民から留学生増加で病気や犯罪が増えるのではないかと心配されましたが、本学の留学生が地域住民と積極的に関わることで、次第に理解が深まっていきました。カメルーンの留学生が交通事故で亡くなった時、彼を乗せた飛行機が飛び立つまで、親交の深かった地域の方々がずっと付き添ってくれたそうです。この話を聞いて、地域が本当にこの大学を受け入れてくれたんだなと気付かされ、悲しい出来事でしたが嬉しくも思いました」

カセムさんの大事な目標であった「愛される大学」が実現した。

高等教育の産業化への抵抗は日本の大学が世界に誇る資質

日本が成長し続けるため、大学の潜在力を最大限に引き出すことが大きく期待されている。海外の高等教育事情にも詳しいカセムさんに、日本の大学がどのように映っているのか伺った。

「欧米などでは高等教育を産業化していくべきという考えが主流ですが、日本の学長はそれに強い抵抗を示されます。このことで日本の大学が立ち遅れているような結論に結び付けられることがあります。私はそう思いません。これまで出会った日本の学長は、次世代の担い手を育てるといった思いを強く持って大学を運営しています。これは、日本の大学が誇るべき優れた資質です。このことはもっと世界に訴えても良いのではないのでしょうか」

取り巻く環境が大きく変わる中で、 大学はさらにグローバル化していく

18歳人口の減少、グローバル化、経済再生と、大学を取り巻く環境が大きく変わる中で、新たな大学の在り方が模索されている。日本の大学はどこへ向かったら良いのか。

「18歳人口の減少に伴い大学の規模を縮小すべきと言う方がいますが、これには反対です。アジア・アフリカでは、高等教育が十分でない国が多くあり、教育を受けられない若者の不満が爆発すると思います。大学は平和の基盤作りの架け橋でもありますので、優れた理念を持った日本の大学は、彼らの受け皿になるに相応しい存在だと思います。また、新興国との貿易が拡大していることを考えても、日本の国益に大きく貢献できるはずで、これまで日本の大学は主に社会のエリートを輩出する存在でしたが、これからは社会全体、一般人のだれもが知的向上ができる存在になる必要があります。また、インターネットなどコミュニケーションツールが発達した現在においては、これを活用した大学像が次のステージとなるでしょう」

国立大学は素晴らしいものを持つ。 さらに改革を進めて欲しい

国立大学では法人化後、国に時代にあった様々な縛りから解放され、各学長のリーダーシップの下、大学改革に取り組んできた。カセムさんは、国立大学をどう見ているのか。

「国立大学は素晴らしいものを持っています。しかし、あまり社会に知られていません。日本

の教員は自分の研究をひけらかすようなもの、言い方はしませんが、大学を宣伝してくれる人を多く作る必要があります。運営面では、法人化で自律的にできると言われていましたが、色々な面でまだ十分ではないと感じます。学長がリーダーシップを発揮するためには、財務と人事に対してどの程度影響力を発揮できるかが重要です。教員の採用・配置は進んだと感じますが、職員の方はどうでしょうか。教職員の人事をどのように戦略的に考えていけるか、もう一步、改革を進めなければならないと思います。また、大学の運営に関しては、すぐに成果を出さなければならない経営的な視点と、長い目で見なければならぬ教学の視点との間で、ミスマッチが生じます。私立大学も同様ですが、その溝をなるべく埋めることが運営の鍵です。これは企業経営よりはるかに難しいと思います。企業側から大学の改革が遅いと言われることがあります。それは企業の理論です。大学が企業と同じようになることで、必ずしも国が良くなるわけではありません。大学が功利主義に傾きすぎて、社会が弱体化した国と同じようになってしまっているのではないかと心配です。

話は少し変わりますが、日本の高等教育政策は非常に縦割りだと思っています。国公私立がもっと連携協力すれば、それぞれの問題を解決することができないのではないのでしょうか」

学生は勇ましく、より独創的に。 響く人生を歩んで欲しい

最後に日本の学生に望むことを尋ねた。

「今の学生は勇気が足りないと感じています。

発展途上国の学生は呑気なことは言っていない現実があります。一方、日本の学生は少子化で過保護に育てられていますので、責任やリスクを背負うということを避けたがります。しかしリスクを避けてばかりいると日本は発展しないと思います」

また、「響く」人生であって欲しいとカセムさんは言う。

「響く」とは、色々なリスクがある中で、物事を成し遂げた時の大きな感動です。この感動は、創造的であればあるほど大きい。だから学生には、好奇心を持って勇ましく人生を歩んで欲しいんです」



モンテ・カセム
(Monte Cassim)

1947年、スリランカ生まれ。スリランカ大学建築学科を卒業後、スリランカ工学技術公団勤務を経て、1972年国費留学生として来日。大阪外国語大学(現大阪大学)、横浜国立大学大学院、東京大学大学院で学ぶ。東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻工学修士、博士課程単位取得満期退学。専門は国土計画、都市工学、環境科学など。三井建設(現三井住友建設)、国際連合地域開発センター勤務の後、1994年より立命館大学教授。2004-09年立命館アジア太平洋大学長、2004-12年学校法人立命館副総長、2013-14年学校法人立命館総長特別補佐、2012年より立命館大学国際平和ミュージアム館長、2014年より学校法人立命館評議員、2015年より同理事補佐を勤める。

Museum
&
Campus

日本全国の国立大学では、文化財指定の歴史的建造物から、芸術・文化施設、最先端の研究施設などの多くの施設を併設し、地域の人々に活用されている。今号ではその中から

「經營機械化展示室」

神戸大学経済経営研究所の「経営機械化展示室」では、国産初の鐘淵実業製バンチカード・システム（PCS）機器など、戦中・戦後に導入された28点の歴

神戸大学

史的機器を保存・展示している。国産PC S 機器は、日本初の経営学博士である同大学教授・

だ。現存するのは1台だけで、2014年には、その歴史的価値が評価され、社会科学系の施設としては初めて「情報処理学会・分散コンピュータ博物館」に認定された。日本の経営機械化の歩みを知ることができる貴重な実物展示となっている。

国産初の鐘淵実業（現クラシエホールディングス）製
P C S 機器。

三重大学

世界一の環境先進大学を目指す三重大学では、環境教育・研究の世界的拠点として開設された「環境・情報科学館」、アントニン・レーモンド設計の国登録有形文化財の「レーモンドホール」、同大学の歴史・文化資料を展示する国登録有形文化財の「三翠会館」を「三重大学ミュージアム」として展開している。

映画『WOOD JOB! 神去なあな日常〜』に同大学の
演習林が使われたことから、特
別企画として、三重高等農林学
校時代の資料、御神木などの映
画の小道具、森の生態や林業の
変遷に関する資料などを3館で
展示。地域の小中高校生や住民
を対象にミュージアムツアーを
行うなど、社会に発信している



戦後木造モダニズムの
先駆者A・レーモンドの
「レーモンドホール」。

帯広畜産大学

帯広畜産大学では、食品による健康被害や動物感染症の発生など食の安心・安全に関する問題を解決するため、学内共同教育研究施設として2014年、「動物食品検査診断センター」を設置。従来の研究部門に、検査診断部門を新設した。畜産学部のある大学に検査診断センターを設置したのは国内初で、コーネル大学の動物衛生診断センターやベクトスインターナショナルの動物健康診断センターなど、海外の大学や企業と連携し、共同研究を行っている。また、検査診断業務を通じて社会貢献するとともに、最先端機器を備えた検査室で学生、研究者、社会人の育研究を行うことで、躍る次世代の優秀な人材を育成する。

「環境放射能研究所」

福島大学「環境放射能研究所」は、東日本大震災の原子力発電所事故を契機に2013年発足。翌年分析棟が完成し、ゲルマニウム半導体検出器や電界放出型透過型電子顕微鏡など、多種多様な分析機器を設置した。主に放射性物質の移動経路を解明するため、河川湖沼・森林・海洋生態系計測法存在形態の6つのプロジェクトを行っている。

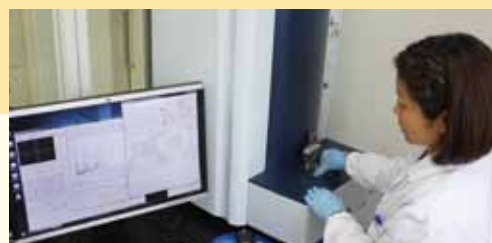
福島大学

例えば、「計測法プロジェクト」では放射性ストロンチウムの迅速分析法を開発。福島第一原子力発電所の廃止措置などに活用されている。

「存在形態プロジェクト」では土壌中の放射性セシウム捕捉促進テンシアルマップを作成。農産物への影響を把握し、農業復興のため化学肥料の検証実験を行っている。



ストロンチウム分析機。



最新の機器を使い臨床検体の微生物を調べる様子。



140年に及ぶ大学の 歴史を刻み続ける 「YNUミュージアム」

横浜国立大学

横浜国立大学（YNU）の教育研究の成果を広く伝えるため2011年に建設された「YNUミュージアム」。開館以来、国内外から多数の来館者があり、2014年には延べ3000人を超えた。

館内の常設展示エリアでは同大学の歴史・現在・未来に関する展示や研究室に代々受け継がれた科学技術資料の展示が行われ、

特別企画展示エリアでは中西準子名誉教授の研究成果の展示など、同大学とゆかりの人物や団体に関する催しが随時開催されている。その他、海外の研究者との懇談写真や大学間交流協定締結時に贈与された記念品なども数多く展示され、前身の横浜師範学校の設置から現在に至るまで、140年に及ぶ同大学の歴史を伝える。

木製フロベラなどの展示が並ぶ「YNUミュージアム」の科学技術資料展示。

キャンパスは遺跡の宝庫！ 調査・公開を担う「埋蔵文化財調査センター」

熊本大学

熊本大学には、黒髪町遺跡群、本庄遺跡、大江遺跡群など、縄文時代から近世にかけての8遺跡が存在する。同大学「埋蔵文化財調査センター」では、これら貴重な遺跡の調査を行い、その成果を広く学内外に公開している。

属病院敷地内で江戸時代の用水路「三の井手」の石垣を発掘。水路の変遷解明は当時の社会の変化を解く鍵にもなり、近世・近代史の研究に寄与する貴重な発見として話題となっている。



墓と埋葬人骨の現地説明会の様子。

地域交流の拠点 ウッドデッキとプレイパーク

東京学芸大学



2500㎡もある大きなウッドデッキ。(右)
子供たちに開放されるプレイパーク。(下)



東京学芸大学の正門を入ると目にとびこんでくるけやき広場。そこに天然木による2500㎡もあるウッドデッキを設置した。

樹木の保護に加え、学生はもちろん、近隣住民の「出会い・交流・発想」が生まれる空間となっている。隣接の附属図書館は、現在改修中で、改修後の2015年5月には広場と一体となる予定だ。

またその先には、学内の自然環境を活かした「プレイパーク」がある。大人の見守りのもと、子供が自由に遊べる人工の山とピオトープ、そして水車小屋のある広場は、午後になると子供たちが自然に触れ、自由に遊び回る。

地域の自治体やNPOと連携して運営しているこの広場からは、毎日子供たちの歓声が聞こえてくる。

被爆建物で医学資料を展示する 「医学資料館」

広島大学

医学部校舎として利用していた旧広島陸軍兵器補給廠11号館を改装し、1978年に国立大学医学部初の資料館として設置された広島大学医学部「医学資料館」。1998年の附属病院棟建て替えの際、建築学的価値が高く、被爆時に臨時救護所と

なるなど歴史的建造物であることから、外壁の被爆煉瓦や石材を再利用し、外観をそのままに建て替えられた。

館内の展示には、約2000年前に広島島の医師が作らせた世界初の木製人体骨格模型「身幹儀」や江戸時代に杉田玄白らが翻訳した「解体新書」の初版本など約500点、和洋の医学書など約3600冊を収蔵。被爆関連の資料も展示しており、学内外の医師や医学研究者のみならず、多くの市民に利用されている。



被爆した煉瓦や石材を使い再現された医学資料館。

伝統文化を次世代に伝えるため お囃子の「わ」で地域を繋ぐ

弘前大学／弘大囃子組

ひろだいはやしぐみ

弘前大学のサークル「弘大囃子組」は、「囃子でみんなを笑顔に！」をモットーに、祭りのお囃子を演奏したり、子供たちに教えるなどの地域活動を行っている。結成のきっかけは、弘前築城400年記念の市民企画イベント「横笛でギネスに挑戦！」。弘

播」。地元の奏者の指導で、弘前市・青森市・黒石市など地域ごとに異なるねぶた囃子や岩木山参詣の「登山囃子」など、地域の民俗行事に伝わる様々なお囃子を学んで、青森の伝統文化への理解を深め、次世代への継承を担う。

前大学から多数の学生が運営や演奏に携わった。これに参加した学生たちが、イベント終了後、お囃子の演奏・普及活動の継続を願って「弘大囃子組」を立ち上げた。

活動の特徴はお囃子の「継承と伝

また地域と一体になった「町作り」もサークルの大事な活動だ。弘前市の支援を受け、「囃子で「わ」を広げようプロジェクト」を展開し、小学生にお囃子を教えたり、敬老会や高齢者施設で演奏したり、年間約40箇所もの施設やイベントに足を運ぶ。

子供たちは間近で聞く演奏に大喜び。高齢者は長年親しんだねぶたの音色に魅せられ、手拍子をしたり踊ったり、会場は笑顔に包まれる。まさに囃子の「わ」が広がるプロジェクトなのだ。

地域の人々と学生の「やさしい思い」が一体となった「弘大囃子組」。市民からの暖かい声援を受けて、今日も元気に活動する。



地元の夏祭りでお囃子を披露する「弘大囃子組」。

今、学生は！

メディカルインベーターを目指し、 ハーバードで臨床実習に励む

東京医科歯科大学／田代 燦さん

あきつ



米国ブリガム・アンド・ウィメンズ病院の看護師たちと談笑する田代さん。

が患者の症状・疾患・治療法について吟味した上で、先輩医師にプレゼンし、議論しながら医学の理解を深めていくのが基本スタイル。語学力はもちろん、高い洞察力やコミュニケーション能力が必要とされる。

「印象に残っているのは、実習で先輩医師のプレゼン直後に、じゃあやってみようか、と指導教員に言われたことです。失敗を恐れずにトライすることが一番大事であることを再確認させられました。ハーバードでは日本とは比較にならないほど多くの最新治療が行われていました。日本も日本発の治療法を世界に発信できるレベルを目指さなければなりません。そのために自分にできることは何か。将来最先端で活躍し、医療レベルの向上に貢献できるよう、頑張りたいと思います」と語る田代さん。

東京医科歯科大学医学部医学科6年の田代燦さんには高い目標がある。それは鋭いリサーチ・マインドを持つて、現在治療不可能な疾患に対する内科的アプローチを見出し、最先端医療を行うことだ。

目標実現に向けて、田代さんは2014年4月から2ヶ月間米国ハーバードメディカルスクールに留学した。米国の臨床実習は学生自身

実習先の病院の階段にはこんな言葉が掲げられていたという。「成功へのエレベーターなど存在しない。諸君は階段を登らなくてはならないのだ」。田代さんはまだ夢への階段を登り始めたばかりだ。

初出場したロボコン世界大会 「ABUロボコン」で見事準優勝！

名古屋工業大学／ロボコン工房

名古屋工業大学の課外活動団体「ロボコン工房」は、「NHK大学ロボコン2014」で優勝し、日本代表として世界大会「ABU（アジア太平洋放送連合）アジア・太平洋ロボコンテスト2014インド・ブネ大会」に日本代表として出場し、準優勝を果たした。

問題は「シーソー」「ボールウォーク」「フランコ」「ジャングルジム」の4つ。ロボコン工房はインドのブネで開催された世界大会で予選リーグを勝ち上がり、準決勝でタイのトゥラキットバンディット大学に勝利し、決勝に進出した。

ロボコンとはロボットを使って課題をクリアし、タイムを競うロボットの競技会で、「ABUロボコン」の日本代表を選考する大会が「NHK大学ロボコン」だ。2014年の競技課題

決勝戦ではベトナムのラクホン大学に惜しくも敗れたものの、初出場で準優勝を果たした。また、競技をクリアするためのアプローチ方法のユニークさが評価されて、オリジナルティあるチームに贈られる「アイディア賞」と大会スポンサーである株式会社ナガセから贈られる「ナガセ賞」を受賞した。

世界大会の直前には安倍晋三内閣総理大臣を表敬訪問し、競技課題の1つ「ボールウォーク」を実演した。

「ロボコン工房」への大学からの支援は他団体と同様であり、少ない資金の中、圧倒的な技術力とチーム力により、このような結果を残したことも大きく評価された。大会の様子はテレビでも放送され、多くのロボコンファンを魅了した。



インドで行われた世界大会準決勝の様子。

国立大学では大学独自のユニークな授業が行われる一方、課外活動で全国大会、世界大会で活躍する学生たちも大勢いる。ここでは授業や課外活動に真剣に取り組む学生、グループの活動を紹介する。

世界ツアーに挑む

徳島県初の女性プロサーファー！

徳島大学／武知実波さん

徳島大学総合科学部3年の武知実波さんは、県内初の女性プロサーファーで、世界ランキング50位（2月24日現在）だ。

小学4年の時、サーフィンを営む両親の影響を受け、サーフィン始めた。アマチュア時代は「ISA（国際サーフィン連盟）世界ジュニア選手権大会」ガールズクラスに、日本代表として4年連続出場。中学2年の時に、世界ジュニアサーフィン選手権の代表に選ばれ、初めて海外遠征を経験し、世界レベルの高さを痛感した。その後も日本代表の座を守り、高校3年の時にプロサーファーに認定された。JPSA（日本プロサーフィン連盟）に所属する現役プロサーファーで、現役女子大生は珍しい。

大学入学後はサーフィン部を設立し、サーフィン初体験の部員の指導に当たっている。大学1年の時には、地元「阿南ふるさと大使」にも選ばれた。JPSA公認プロサーファーとして年に2、3ヶ月は海外遠征があり、学生生活との両立は並大抵ではない。

「学校と練習とで大変ですが、サーフィンを勉強ができない言い訳にしたいと思いません。プロの世界は厳しいですが、世界ツアーを転戦することで様々な経験を積み、同時に大学での勉強を通して自分を高めていきたい」と話す武知さんは、時間を最大限に有効活用して頑張っている。

将来は、大学在学中に学んだ経験を活かして、社会やサーフィン業界に自分にしかできない方法で貢献していきたい、と目を輝かせている。



武知さんの華麗なライディング。

国立大学 vol.36 March 2015

編集・発行／一般社団法人 国立大学協会
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-1-2
TEL:03-4212-3506

表紙：前立命館アジア太平洋大学長
学校法人立命館評議員・理事補佐
立命館大学国際平和ミュージアム館長
モンテ・カセム

撮影：東京藝術大学 美術学部准教授
鈴木理策



国立大学協会

The Japan Association of National Universities

<http://www.janu.jp>